令和 5 年 10 月のおたより

今年のノーベル生理学・医学賞は、新型コロナウイルスに対するワクチンの基礎技術を開発した二人の研究者に。その一人、カタリン・カリコさん（68）は冷戦下、生まれ故郷のハンガリーから夫や子供とともに着の身着のままで米国に渡りました。任期付きのポストを転々としつつ、mRNA を使った脳卒中治療などを研究し続けていました。

しかし、思ったような結果は出ず、mRNA 研究をあきらめるか、降格と減給を受け入れて研究を続けるかの選択を迫られましたが、自身の信念を貫く道を選びました。状況が変わるきっかけは、異なる分野の研究者が注目して行った研究報告でした。

新型コロナの流行がはじまる頃には実用化のめどが立ち、そのうちモデルナ社とファイザー社の mRNA ワクチンなどが世界で使用されるようになりました。

成功までの道は平坦ではなく、研究資金が枯渇するなかで多くの困難と長い時間がかかったにもかかわらず、情熱を注ぎ続けられたのはなぜなのか。カリコさんはインタビューで語っています。「職を失ったとき、なぜ私なのかと考える代わりに、『次にするべきことは何か』と切り替えました。自分の力で変えられないものは受け入れ、他人のせいにしない。もちろんギブアップはしませんでした」と。

日本にも知己が多く、出会いを結んだ人は「その人柄は目を見張るもので、すべての苦労を明るく楽しい思い出に変えてしまうユーモアと、科学者としての好奇心に満ち溢れた話しぶりは、実に堂々とされたものでした」（伊藤慶應義塾長）と評価しています。

「コスパ」や「タイパ」（※）の考え方からは生まれない大切な価値観と言えそうです。

（K）

※注　「コスパ」はコストパフォーマンスの略＝支払った費用に対する効果の見返り。「タイパ」はタイムパフォーマンス＝費やした時間に対する効果の見返り。IT 技術の進化でより多くの情報を素早く処理することを求める。

記

＜10 月度学習会＞

・日　時：10 月 29 日（日）13：30～（15：30 終了予定）

・会　場：菜の花ホール

・講演：「一精神科医から見える“ひきこもり“をめぐって」

～背景にある発達障害・社交不安症などにもふれながら～

館山メンタルクリニック院長：渡辺　啓治 先生　(精神科・認知症専門医)

長年にわたり地域の精神医療や自立支援に携わり、研究熱心で多くの医療関係者の指導育成にも尽力しています。また、発達障害・不安症など近年注目されている様々な精神症状などついて、各方面からその知見が注目されています。

・質疑応答

・グループミーティング

※当日のご出欠をあらかじめお知らせください。
090-2335-1338 加藤＝ショートメール可